

特集 1

日本天文学会「日本天文遺産」

～発足から 3 年～

松尾 厚（日本天文遺産選考委員）、松村雅文（日本天文遺産選考委員／香川大学）

1. はじめに

(公社)日本天文学会（以下、天文学会）では、歴史的に貴重な天文学・暦学関連の遺産を保存し、次世代に伝えることを目的として、これらの遺産（史跡・事物等）を「日本天文遺産」(Japan Astronomical Heritage)として認定する制度を設けた（2016 年度）。この制度は若干の準備期間を経て、2018 年度から実際の運用を始め、2020 年度（2021 年 3 月）の天文遺産認定が 3 回目となった。

当会には天文学史に関心を持つ会員も多く、天文学史に関する事柄を教育普及に取り入れる活動もなされている。また、後述のように日本天文遺産にはその制度設計の段階から、当会会員も（天文学会員としてではあるが）多数加わっている。

本稿では運用開始から 3 年を経過した日本天文遺産の制度と認定遺産の概要について紹介し、その広報宣伝など今後の日本天文遺産への協力と遺産の活用をお願いするものである。なお、本稿には支部集会での講演時には未公表であった 2020 年度認定遺産の紹介を含んでいる。

2. これまでの経過

日本天文遺産について具体的な動きが始まったのは、2015 年 5 月の天文学会代議員総会において、「日本天文学会として天文遺産の認定制度を設ける」との提案がされて以降である（提案者：渡部潤一）。

その提案理由としては「暦学・天文学関連の遺産は、歴史の舞台では比較的マイナーに扱われており、地域の理解も得られないまま、消失・逸失してしまう例が多い」「関連自治体

に当該遺産の重要性を知つてもらうことにより、保存や整備を促し、その消失・逸失を防ぐことができる」と考える」「国際天文学連合は、世界天文遺産（World Heritage of Astronomy）の事業をユネスコと協同で進めしており、日本もこの事業に寄与できる可能性がある」などを挙げている。日本天文遺産創設の経緯については、天文月報でも少し詳しく紹介されている[1]。

なお、他の学術団体でも関連遺産の認定・選定は早いぶん実施されていて、土木学会「選奨土木遺産」（2000 年度～）、日本機械学会「機械遺産」（2007 年～）、日本化学会「化学遺産」（2008 年～）などは、比較的古くから大規模に行われている。

以下、これまでの流れを年表形式で記す。

- ・ 2015 年 8 月 天文遺産顕彰制度検討 WG 立ち上げ、制度設計の検討（メンバー：半田利弘*（鹿児島大学）、渡部潤一（国立天文台）、洞口俊博*（国立科学博物館）、松尾 厚*（山口県立博物館））
- ・ 2016 年 9 月 天文学会代議員総会 日本天文遺産制度の設置決定（日本天文学会委員会等に関する細則の改正）
- ・ 2016 年 12 月 天文学会理事会 日本天文遺産内規の制定
- ・ 2017 年 6 月 日本天文遺産選考委員会発足、制度運用の準備作業を開始（選考委員：半田利弘*（委員長）、中村 士（大東文化大学）、洞口俊博*、嘉数次人*（大阪市立科学館）、松尾 厚*）
- ・ 2018 年 9 月

日本天文遺産候補の推薦受付を開始（天文学会会員を対象）

・2019年3月

初回の日本天文遺産を認定・公表（2件）

・2020年3月

2019年度日本天文遺産を認定（3件）

（2020年天文学会春季年会中止のため、公表は2020年9月）

・2021年3月

2020年度日本天文遺産を認定・公表（3件）

（現在の選考委員：洞口俊博*（委員長）、

嘉数次人*、半田利弘*、馬場 彩、松尾 厚*、
松村雅文*）

※選考委員等の所属は当時のもので、氏名の
*印は当会会員を示す（2018年会員名簿）。

に進めている[2]。

①天文学会会員が天文遺産としての候補事物を推薦

②推薦された候補について選考委員会（委員は天文学会会員）が調査・選考し、天文学会代議員総会で決定（対象事物の管理者／所有者には事前に了解を得る）

③認定遺産については、認定証及びパネルまたは楯を贈呈

4. これまでの認定遺産

以下、2020年度までの3年間に認定された日本天文遺産について、天文学会の天文遺産のページ[3]を基に紹介する。詳細は原ページを参照されたい。

4.1 2018年度認定遺産

（1）明月記

明月記は小倉百人一首などの撰者として知られる藤原定家（1162～1241）が記した日記であり、超新星3件（1006年、1054年、1181年）のほか、日食や月食、オーロラなどの天文現象についての記載がある。日本天文遺産としてのカテゴリーは「文献」。（公財）冷泉家時雨亭文庫所蔵（京都市）、国宝。

この資料について文化庁のデータベース[4]には、「変動期の宮廷・公家社会の実相や武家の動静をはじめ、自らの文学活動や所感などを記した鎌倉時代前期研究の第一級史料である」と記されているが、認定を機に天文史料としての側面を大いにアピールできればと考えている。すでに Wikipedia の「明月記」の冒頭には、「2019年日本天文遺産に選定された」と記されており、たいへん嬉しく思っている。

（2）会津日新館天文台跡

日新館天文台は、旧会津藩校日新館（1803年完成）に設けられた天文台である。江戸時代の天文台としては、東京では浅草などの幕

3. 日本天文遺産の制度概要

天文学会は、日本天文遺産の趣旨として「歴史的に貴重な天文学・暦学関連の遺産を大切に保存し、文化的遺産として次世代に伝えることを、日本天文学会のひとつの使命と考え、日本における天文学・暦学的な視点で歴史的意義のある史跡や事物を、日本天文遺産（Japan Astronomical Heritage）として認定する」を挙げており[2]、おおむね他の学術団体の選定遺産等の趣旨に準じたものとなっている。

（1）対象

天文遺産認定の対象事物は、次のようなものである[2]。

①史跡・建造物：天文学上重要であった地点、建築・構造物

②物品：天文学上の重要な発見に関与する物品や天文学史上意義が高い物品、特に観測機器、測定装置など

③文献：歴史的意義のある暦学・天文学関連の文書類

（2）認定

天文遺産の認定手続きとしては、次のよう

府の天文台、地方では水戸藩、薩摩藩、阿波藩などの天文台が知られているが、現在ではすべて失われ、日新館天文台が現存唯一の遺構となっている(図 1)。カテゴリーは「史跡」、会津若松市指定史跡。



図 1 会津日新館天文台跡(福島県会津若松市)
台上の祠は天文台とは無関係。(2018年11月、著者撮影)

4.2 2019年度認定遺産

(1) キトラ古墳天井壁画

キトラ古墳は現在の奈良県明日香村に、7世紀末～8世紀初め頃に造営された古墳であり、その石室の天井に天文図、日像、月像が発見されている。

キトラ古墳天井壁画は、古代の天文学の水準のみならず、アジア大陸から日本への科学



図 2 キトラ古墳壁画保存管理施設(2019年12月、洞口俊博撮影)

知識や文化の流入を知ることができ、天文図は科学的な分析に耐えうる本格的な星図として、天文学史上きわめて重要である。カテゴリーは「物品」、国宝。

現在、天文図等の壁画は古墳近くの「キトラ古墳壁画保存管理施設」で保管され、併設施設でそのレプリカ等を見ることができる(図 2)。

(2) 明治 20 年皆既日食観測地及び観測日食碑

明治 20 年皆既日食観測地及び観測日食碑は、日本における最初の近代的な皆既日食の観測地及びその観測記念碑である(図 3)。カテゴリーは「史跡」、三条市指定史跡。

1887(明治 20) 年 8 月 19 日の日食は、新潟県から福島県・茨城県にかけて皆既帯が通り、専門家だけでなく一般市民の多数が観測に参加した。この皆既日食ではコロナの写真撮影が行われ、外国からも観測隊が来日した。



図 3 明治 20 年皆既日食観測地及び観測日食碑(新潟県三条市永明寺山頂)
左手の円形の石垣の上に観測日食碑がある。
(2019年11月、著者撮影)

もっとも当日の天候は不安定で、実際に日食が観測できたのは千葉県の銚子と新潟県三条市に限られた。三条市での観測は荒井郁之助らにより永明寺山頂で行われ、望遠鏡によるコロナの写真撮影も成功し(銚子は眼視観測のみ)、国内外の文献で報告された。

(3) 6 m ミリ波電波望遠鏡

この電波望遠鏡は、1970 年に当時の東京天文台三鷹キャンパスに建設された世界で 3 番目のミリ波望遠鏡である。野辺山宇宙電波観測所の 45m 電波望遠鏡や南米チリのアルマ望遠鏡などにより、日本の宇宙電波観測は現在大きな発展を遂げているが、この望遠鏡はその礎となった。カテゴリーは「物品」。

1984 年に三鷹での運用を終了した後、水沢観測所を経て野辺山に移され、VLBI 観測に成功し、1993 年にはさらに鹿児島に移設されて VLBI 観測等で貢献した。鹿児島での運用終了後、2018 年 10 月に再び三鷹に移され、現在は歴史的望遠鏡として保存・公開されている（図 4）。



図 4 6m ミリ波電波望遠鏡（国立天文台三鷹キャンパス） © 国立天文台

4.3 2020 年度認定遺産

(1) 仙台藩天文学器機

仙台藩天文学器機は、18~19 世紀に仙台藩の天文学者たちが製作、使用したもので、渾天儀、象限儀と大小 2 基の天球儀の合計 4 点からなる（図 5）。特に渾天儀については、日本に現存する唯一の観測用渾天儀とされる。これらは元仙台藩主の伊達家に保管されていたもので、1956 年（昭和 31 年）に旧仙台市天文台に移され、現在の仙台市天文台が引き継いで保管している。カテゴリーは「物品」、国指定重要文化財。



図 5 仙台藩天文学器機（仙台市天文台で展示中の写真）
(2020 年 12 月、洞口俊博撮影)

(2) 臨時緯度観測所眼視天頂儀及び関連建築物

これらの遺産は、臨時緯度観測所（現・国立天文台水沢 VLBI 観測所）の初代所長であった木村榮の時代から使われていた眼視天頂儀（ドイツ・ヴァンシャフ社製、図 6）及びそれを格納していた眼視天頂儀室、さらに南北方向の較正用の位置標準光源が設置された目標台とこれを格納する覆屋からなる。いずれも国立天文台水沢 VLBI 観測所（岩手県奥州市）構内にある。

眼視天頂儀は、緯度変化に関する国際共同研究のため、1899 年（明治 32 年）に臨時緯度観測所に設置され、1927 年（昭和 2 年）まで緯度測定に使用された。木村榮の Z 項発見に大いに貢献した装置であり、その価値は高い。カテゴリーは「物品」「建造物」、「眼視天頂儀室」と「眼視天頂儀目」



図 6 眼視天頂儀 1 号機
(水沢キャンパスの木村榮記念館内で展示)
© 国立天文台

標台及び覆屋」は国登録有形文化財。

(3) 商船学校天体観測所

商船学校天体観測所（赤道儀室及び子午儀室）は、1903年（明治36年）に当時の商船学校内に建設された貴重な明治期の天文台建築であり、東京海洋大学越中島キャンパス（旧商船学校キャンパス）に、ほぼ建築当時のままで残されている（図7）。

赤道儀室は煉瓦造りの二階建てで、スリットを設けた回転可能な丸屋根を持ち、現存する日本最古のドーム屋根形状の天体観測室として知られている。子午儀室も煉瓦造りで、平屋の八角錐形の固定屋根となっており、子午線観測用に屋根及び壁面にスリットを設けている。カテゴリーは「建造物」、赤道儀室と子午儀室とともに国登録有形文化財。

なお、現存する古い天体観測室の完成年は、前述の臨時緯度観測所眼視天頂儀室（スライディングルーフ）が1899年（明治32年）、国立天文台（三鷹）で最古の天体観測室（20cm赤道儀室（ドーム形状））は、1921年（大正10年）である。

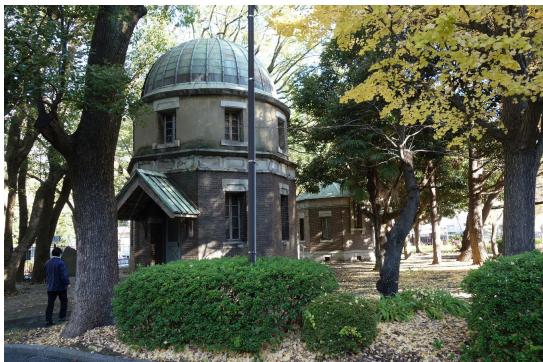


図7 商船学校天体観測所（東京都江東区）
手前が赤道儀室、そのすぐ右奥が子午儀室。
(2020年12月、著者撮影)

5. おわりに

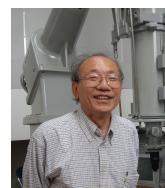
日本天文遺産の制度は、まだ始まったばかりであり、この運用に関して多くの方々からの助言・示唆を得たいと考えている。これま

での認定件数もわずか8件であるが、これから年ごとに増えて全国各地で見られるようになることと思う。日本天文遺産が広く知られ、天文の教育普及や郷土学習、あるいは地域起こし、観光などに広く活用されることを願っている。

また、日本天文遺産は天文学会会員から推薦された事物を選考対象としているが、当会にも多くの天文学会会員が属している。適切な事物について積極的な推薦をお願いしたい。

文 献

- [1] 半田利弘 (2019) 「日本天文学会日本天文遺産の発足」, 天文月報, **112**: 815.
- [2] 「日本天文学会日本天文遺産内規」
<https://www.asj.or.jp/jp/about/articles/#isan>
- [3] 日本天文学会「日本天文遺産認定一覧」
<https://www.asj.or.jp/jp/activities/prize/heritage/recipients/>
- [4] 文化庁、国指定文化財等データベース「明月記〈自筆本ノ〉」
<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/9062>



松尾 厚



松村 雅文